

第2章 探究的な学習を充実させる単元展開の方法

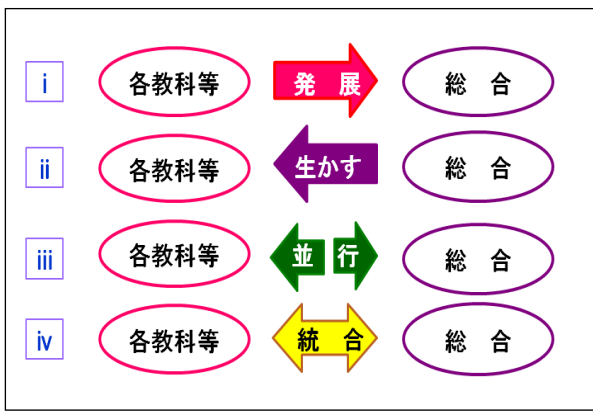
1 各教科等との関連を図る ◇◆◆◆◇

小学校学習指導要領第1章総則第4「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」では、各教科等との関連について次のように規定しています。

- 1 (1) 各教科等及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにすること
- 1 (4) 児童の実態等を考慮し、指導の効果を高めるため、合科的・関連的な指導を進めること

○●○ 各教科等との関連の形 ○●○

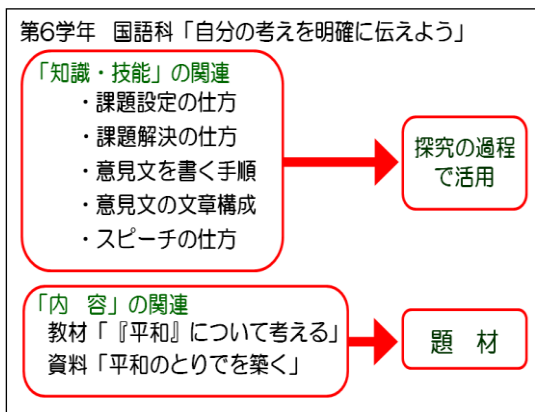
各教科等との関連の仕方は、下の図に示したように4通りの形が考えられます。



〈各教科等との関連の仕方〉

□iは、各教科等で身に付けた力を、「総合」で働かせるということです。各教科等で得た知識や技能等が学習や生活において生かされ、総合的に働くよいうという理念から「総合」が創設されました。このことから考えると、この□iが一番オーソドックスな形です。□iiは、各教科等で学習するよりも先に「総合」で行うということです。□iiiは、各教科等と「総合」で行うということです。□ivは、例えば、国語科の学習で行う話し合いや報告文を書くときのテーマを「総合」の内容にするというように統合的に扱うということです。

また、「総合」と各教科等とは、「知識・技能」と「内容」の二通りの関連の仕方があります。第6学年の国語科の光村図書の単元「自分の考えを明確に伝えよう」を例に、それぞれの関連の仕方について次の図に示しました。



〈各教科等との「知識・技能」と「内容」の関連の仕方例〉

知識・技能の関連

国語科で身に付けた課題の設定の仕方、課題解決の仕方といった学び方や意見文を書く手順や文章構成、スピーチの仕方といった知識・技能を「総合」の探究の過程で活用するという関連の仕方があります。

内容の関連

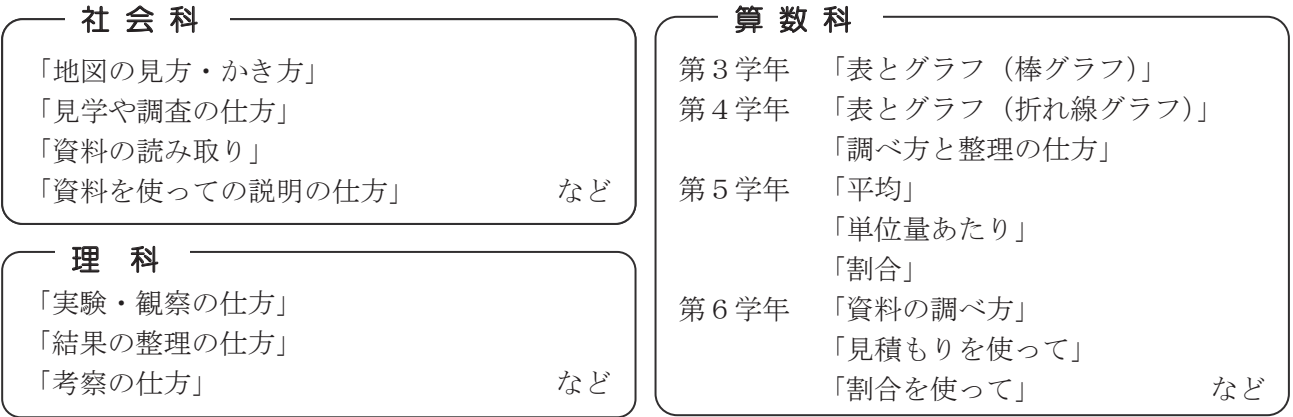
この単元でこれらの知識・技能を身に付けるために読む、教材『平和』について考える」資料「平和のとりでを築く」に書かれている内容を「総合」の題材とする関連の仕方があります。

○●○ 各教科等の基盤となる司会力・対話力 ○●○

子ども一人一人に司会力・対話力を育成しなければなりません。そのためには、話す・聞く活動、話し合い活動等の基礎・基本となる言語活動を充実させることが大切です。これらの言語活動を国語科だけでなく、全ての教科等の中で意図的に、繰り返し行っていくことで言語能力は定着していきます。

〇●〇 各教科等との関連の仕方例 〇●〇

各教科等との関連の仕方の例とは次のようなものです。

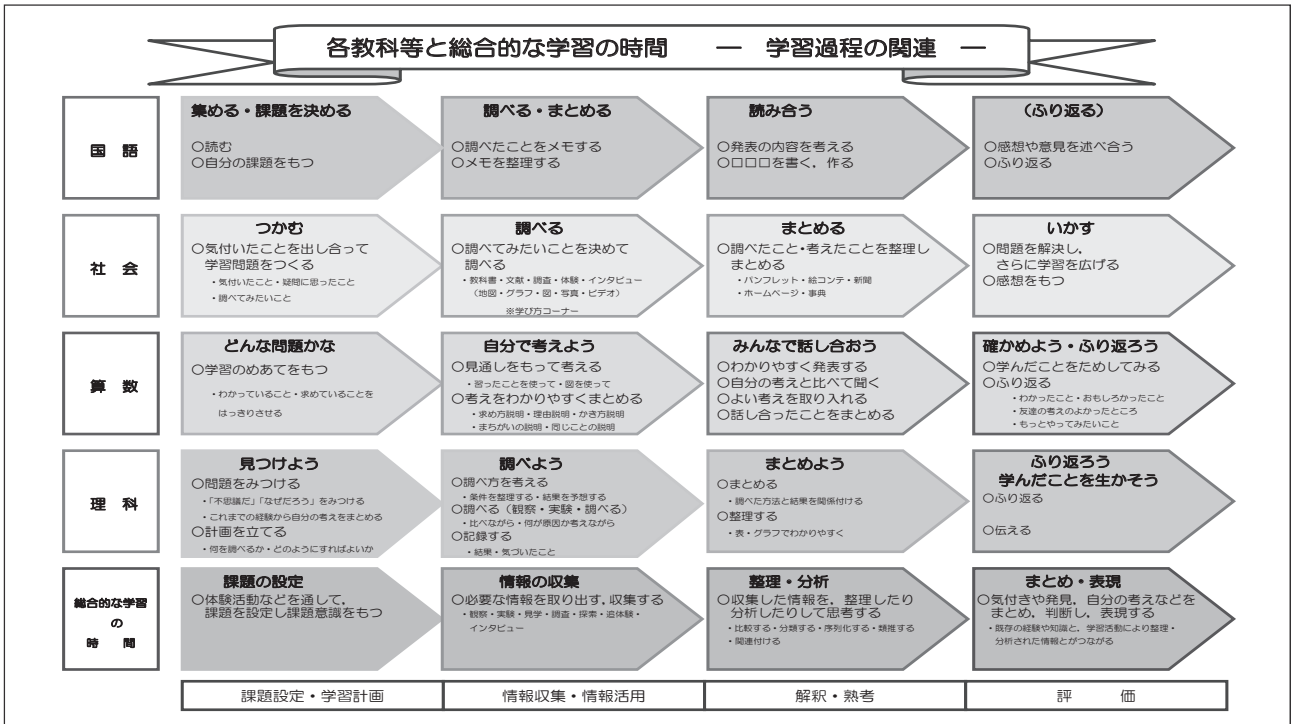


前文部科学省主任視学官の嶋野道弘氏が、「総合」の「単元を構想するとき組み入れる五つの活動」として「実験・観察の要素」と「基礎的な算数活動」を挙げています。このことから、各教科等の「知識・技能」と関連を図り、効果的で効率的な指導を行うことで探究的な学習が充実するとともに、子どもたちに確かな力が育まれるのです。

〇●〇 各教科の学習過程との関連 〇●〇

各教科等との「知識・技能」の関連の一つとして、学び方というべき学習過程の関連も大切です。そこで、各教科の教科書を調べて、学習過程を明らかにしました。調査した4教科の学習過程と「総合」の探究の過程、PISAの読解のプロセスをまとめたものが下の図です。

この図を見ると、各教科において問題解決的な学習を前提としており、「課題を設定する」という学習活動は必須の活動であることがわかります。また、各教科によって文言は違いますが、学習過程に、「課題を見つける・つくる」「計画を立てる」「まとめる」「伝える」「話し合う」「振り返る」などの主体的な活動が適切に位置付けられていることがわかります。そして、これらの学習過程は、「総合」の探究の過程、読解のプロセスとも合致しています。



〈各教科等と「総合」の学習過程〉

2 各教科等の言語活動を充実させる ◇◆◆◆

平成20年に出された中教審答申において、学習指導要領のねらいの実現のための中核として「言語活動の充実」が位置付けられました。言語活動を通して、各教科等の目標の実現、内容の習得をめざします。そのことが、思考力・判断力・表現力等を育成することにつながり、更には、『生きる力』の育成という学習指導要領の理念実現につながるからです。

言語活動の中核を担うのは国語科ですが、国語科だけで言語活動を行うのではなく、全ての教科等で言語活動を行わなければなりません。そこで学習指導要領において各教科等の「言語活動の充実」がどのように扱われているかを調べました。国語科、社会科、算数科、理科の言語活動の例をみておきましょう。

国語科

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の言語活動によって学習が行われています。これらの活動の位置付けを、自ら学び課題を解決する能力を育成するという観点から見直し、単元を通じた言語活動として位置付けることが重要となります。

算数科

言葉による表現とともに、数、式、図、表、グラフといった数学的な表現の方法を用いることが特質で、式を言葉、図、表、グラフなどと関連付けて自分の考えを説明したり、伝え合ったりできることが大切です。

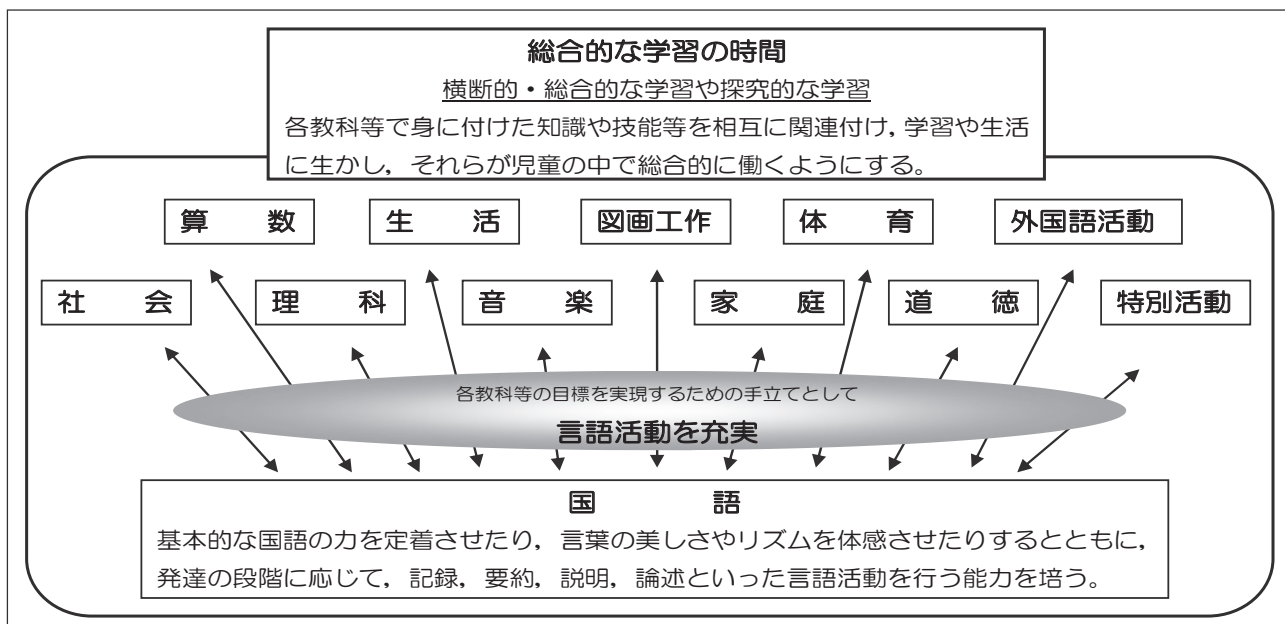
社会科

目標に「考えたこと」という文言が加わり、今まで以上に説明、論述、討論といった言語活動を通して考えたり判断したりしたことを図表や、イラストを使って言語で表現することが求められています。

理科

「科学的な言葉や概念」を使用して考えたり説明したりすることが特質です。また、「考察、まとめ」の場面では、観察や実験の結果を表やグラフに整理し、解釈し、予想や仮説と関係付けながら考察を言語化し、どう表現するかが大切となります。

各教科等で言語活動を充実させていく上で基盤となるのは国語科であり、発達段階に応じて「記録、要約、説明、論述」といった言語活動を通して言語能力を培うことが大切です。そして、培った能力を活かし、各教科等において言語活動を充実させることが重要です。「総合」は、横断的・総合的な学習であり、各教科等で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活に生かし、



第2章 探究的な学習を充実させる単元展開の方法

子どもの中で総合的に働くようにすることをねらいとしています。そこで、「総合」を各教科等を包括するものとして位置付けました。この考えを示したものが前のページの図です。各教科等での基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、観察・実験、レポートの作成、論述といった言語活動を充実させることで、「総合」における各教科等を横断、総合した探究的な学習も充実していきます。

〇●〇 4 教科の教科書における言語活動 〇●〇

学習指導要領を受けて、教科書ではどのような言語活動が取り上げられているかについても、調査し、下のように整理しました。

国語科 教科書における言語活動

(第3学年, 第5学年)

第3学年		国	第5学年	
○国語辞典 ○事典 ○図鑑 ○物語	○説明文 (科学読み物) ○詩	テキスト	○国語辞典 ○漢字辞典 ○新聞 ○物語	○説明文 ○伝記 ○詩
○調べるために読む ○予想して読む ○比べて読む ○想像を広げて読む ○結びつけて読む ○自分ごととして読む ○音読する ○かんばん ○報告 (出来事・調査)	○説明 (本・出来事・活動・様子) ○引用 ○手紙 (お礼) ○日記 ○物語 ○感想文 ○調査報告文 ○紹介文 ○かるた ○推敲 ○スピーチ ○交流会 ○詩集	読書・表現活動	○調べるために読む ○予想して読む ○比べて読む ○想像を広げて読む ○関連付けて読む ○自分ごととして読む ○音読する ○関係図 ○メモ ○説明 (様子・理由) ○インタビュー	○資料を提示して話す ○報告 ○引用 ○要約 ○意見文 ○体験報告文 ○説明文 ○物語 ○感想文 ○活動報告文 ○推薦文 ○提案書 ○スピーチ ○朗読 ○討論

注) で囲んである言語活動は、単元を貫く言語活動を示している。
「国語 三上 わかば」 「国語 三下 あおぞら」
「国語 五 銀河」 光村図書出版株式会社 2011.2

算数科 教科書における言語活動

(第3学年, 第5学年)

第3学年		算	第5学年	
○文章 ○日記 ○お話	○図 ○グラフ ○表	テキスト	○文章 ○図 ○パンフレット	○広告・チラシ ○グラフ ○表
○予想して読む ○確かめながら読む ○比べて読む ○感想 ○計算のしかたの説明 ○求め方の説明	○理由の説明 ○考え方の説明 ○間違いの説明 ○お話づくり ○問題づくり ○グラフを表す ○表を表す	読書・表現活動	○予想して読む ○確かめながら読む ○比べて読む ○感想 ○表を表す ○観察・記録 ○問題づくり ○求め方の説明 ○考え方の説明 ○かき方の説明	○計算のしかたの説明 ○比べ方の説明 ○調べ方の説明 ○見つけ方の説明 ○間違いの説明 ○同じになる説明 ○理由の説明 ○関係の説明 ○発表

注) 「わくわく算数」 3上, 3下, 5上, 5下
株式会社新興出版社啓林館 2011.2

社会科 教科書における言語活動

(第3学年, 第5学年)

第3学年		社	第5学年	
○地図 ○絵地図 ○航空写真 ○写真 ○ガイドブック	○パンフレット ○チラシ・広告 ○インターネット ○ウェブサイト ○国語辞典	テキスト	○地図 ○地球儀 ○立体地形図 ○写真 ○ビデオ ○統計資料 (表・グラフ・図)	○パンフレット ○カタログ ○チラシ ○新聞 ○インタビュー ○ホームページ ○手紙 ○電子メール
○予想して読む ○比べて読む ○関連づけながら読む ○白地図にまとめる ○手紙 (小見出し) ○アンケート ○インタビュー (質問カード) ○見学メモ ○紹介カード ○観察・記録 (お客さんカード・お店やさんカード) (メモ)	○グラフにまとめる ○表にまとめる ○3コマまんが ○説明 ○レポート ○キャッチコピー ○紹介地図 ○パンフレット ○ポスター ○仕事マップ ○年表 ○新聞 ○新聞 (キャプション) ○郷土カルタ ○紹介 ○カレンダー (こよみ)	読書・表現活動	○予想して読む ○比べて読む ○関連付けて読む ○白地図にまとめる ○ノートにまとめる ○クイズの問題作り ○見学・記録 ○感想文 ○説明 ○キャッチコピー	○リーフレット ○事典 ○農作業暦 ○模式図 ○年表 ○紹介文 ○提案する ○パンフレット ○新聞 ○絵コンテ (テレビ番組作り) ○ホームページ ○作品

注) 第3学年においては副読本の「わたしたちの京都」に示された言語活動も含む。 で囲んである言語活動は、「学習のまとめ」で行う言語活動を示している。「新しい社会」3・4上, 5下 東京書籍株式会社 2011.2
「平成23年度版 わたしたちの京都」3・4年上 2011.4

理科 教科書における言語活動

(第3学年, 第5学年)

第3学年		理	第5学年	
○図鑑 ○インターネット ○実験結果	○自然事象 (植物・昆虫の成長)	テキスト	○教科書 ○図鑑 ○インターネット ○参考書 ○ビデオ ○実験結果	○気象情報 ○自然事象 (天気, 植物・メダカ・人の成長)
○比べて読む ○関係付けて読む ○共通点・差異点を見つけて読む ○観察・記録 ○観察カード ○実験・記録	○考察 ○グラフを表す ○表を表す ○紹介・説明 ○育ち方説明 ○理由説明 ○図鑑作り ○おもちゃ作り ○レポート ○ポスター ○発表	読書・表現活動	○比べて読む ○関係付けて読む ○共通点・差異点を見つけて読む ○条件に着目して読む ○予想・仮説 ○観察・記録 ○実験・記録 ○調べたことをまとめる ○グラフを表す	○表を表す ○考察 ○理由説明 ○育ち方・変化の説明 ○はたらきの説明 ○共通点の説明 ○考え方・方法の説明 ○おもちゃ作り ○レポート ○ポスター ○発表

注) 「たのしい理科」 3年, 5年-1, 5年-2 大日本図書株式会社 2011.2

3 学年の系統化を図る ◆◆◆◆◆

『学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』に「学年の系統性」について以下のような記述が見られます。

育てようとする資質や能力及び態度の設定に際しては、学年段階ごとに考えることが必要となってくる。(略)…全教職員がそれぞれの実践経験を生かし、児童の実態を踏まえて考えることが大切である。その際、以下のような視点も参考になる。

- ・各教科等に示された目標及び内容
- ・児童のそれまでの経験
- ・児童の興味・関心
- ・直接体験から間接体験へとといった、児童の活動の質的变化
- ・具体から抽象へとといった、児童の思考や認識の発達

なお、一つの資質や能力及び態度について設定すべき段階の数については…(略)…2学年をひとまとまりとした2段階による設定が、実践事例としても多く、また現実的な示し方である。

「第5章 第3節 育てようとする資質や能力及び態度の設定」

学年の系統化は、「付けたい力」と「内容」の両面から確かにしていかなければなりません。

○○○ 付けたい力の系統化 ○○○

「付けたい力」を系統化する取組の例として、『総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料（小学校）』（平成23年11月・国立教育政策研究所）に挙げられていた例示②の「育てようとする資質や能力及び態度」を踏まえ、六つの観点を設定し、右の表を作成しました。

六つの観点とは、次の力です。

【学習方法に関すること】

- (1) 課題設定力
- (2) 情報収集力
- (3) 思考力
- (4) 表現力

【自分自身に関すること】

- (5) 活用力

【他者や社会とのかかわりに関すること】

- (6) 学び合う力

この表では、小学校、中学校の9年間を見通し、学年に応じて系統的に子どものあるべき姿を示しました。これらによって、実現したい子どもの姿を明確にし、段階的に付けたい力を育成するようにします。

探究的な学習

育てたい資質や能力及び態度 (評価の観点)		学習方法に	
		課題設定力	情報収集力
キーワード		<ul style="list-style-type: none"> ・課題を発見し、設定する力 ・課題の解決方法や手順を考え、見直しをもつ力 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題を解決する方法を選択し、必要な情報を収集する力
		体験活動 課題発見 既習事項 見直し・計画	体験活動 情報の蓄積
小学校	第1・2学年 生活科	自分と集団との関わりの中から自分をもっと知りたいこと、やってみようことをはっきりさせることができる。 毎時間のめあてをもち、活動の内容や方法を先生と相談して決めることができる。	身近な人・社会・自然と関わる活動を通して、自分をもっと知りたい、やってみようと思ったことを探ることができる。
	第3・4学年 総合的な学習の時間	自分をとりまく地域社会の中から、更に調べてみたい課題を設定することができる。 課題に対する予想を立て、その課題を解決するための方法や毎時間の活動計画を、示された活動の中から選択して決めることができる。	多様な情報収集の方法を知り、課題に応じて方法を選択し、手引きを基に調べることができる。
	第5・6学年 総合的な学習の時間	自分をとりまく国際社会の中から、自分の興味や能力に応じた課題を設定することができる。 課題に対する予想を立て、その課題を解決するための方法や毎時間の活動計画を、自分で決めることができる。	多様な情報収集の方法から、課題に応じて方法を選択し、調べることができる。
中学校	総合的な学習の時間	国際社会の様々な事象の中から、自分が調べてみたい意味ある課題を設定することができる。 仮説を立て、課題を解決するための視点を明らかにし、長期的な展望をもち、課題を解決するための計画を、自分で決めることができる。	多様な情報収集の方法から、課題に応じて最適な方法を選択し、調べることができる。

○●○ 内容の系統化 ○●○

「内容の系統化」とは、4年間同じ内容を扱う、違った内容を扱う、同じ内容と違った内容を扱うの三つの形が考えられます。

同じ「内容」を扱う

よい点

- ・一つの内容を掘り下げて行える
- ・新しい対象に出会っても戸惑いが少ない

留意点

「内容」の広がりがないので意図的に子どもの視野を広げるように単元を構想する。

〈同じ「内容」を扱う単元例〉

	対象	主な活動
(第2学年)	(お年寄り)	(地域のお年寄りに普遊びを教えてもらう)
第3学年	お年寄り	高齢者福祉施設を訪問。発表・ふれあい。
第4学年	視覚に障害のある人	国語科資料「手と心で読む」 アイマスク体験。話を聞く。ふれあい。
第5学年	身体に障害のある人	車いす体験。話を聞く。 車いすバスケット。車いす介助。
第6学年	障害のある全ての人 ボランティア	障害のある人、ボランティアから話を聞く。アドバイスをもらう。

⇔

違った「内容」を扱う

よい点

- ・4年間でいろいろな「内容」を学習できる

留意点

同じ「内容」を扱う場合と比べると体験の積み重ねが不足している。

〈違った「内容」を扱う単元例〉

	扱う「内容」	他教科等との関連
第3学年	国際理解	国語科 資料「3年とうげ」
	地域・暮らし	社会科
第4学年	福祉	国語科 資料「手と心で読む」
	情報	国語科 教材「アップとルーズで伝える」
第5学年	生き方探究 (キャリア教育)	スチューデントシティ
	環境	理科、学校行事(長期宿泊学習)
第6学年	伝統文化	社会科
	生き方探究 (キャリア教育)	卒業に向けて

同じ「内容」と
違った「内容」を扱う

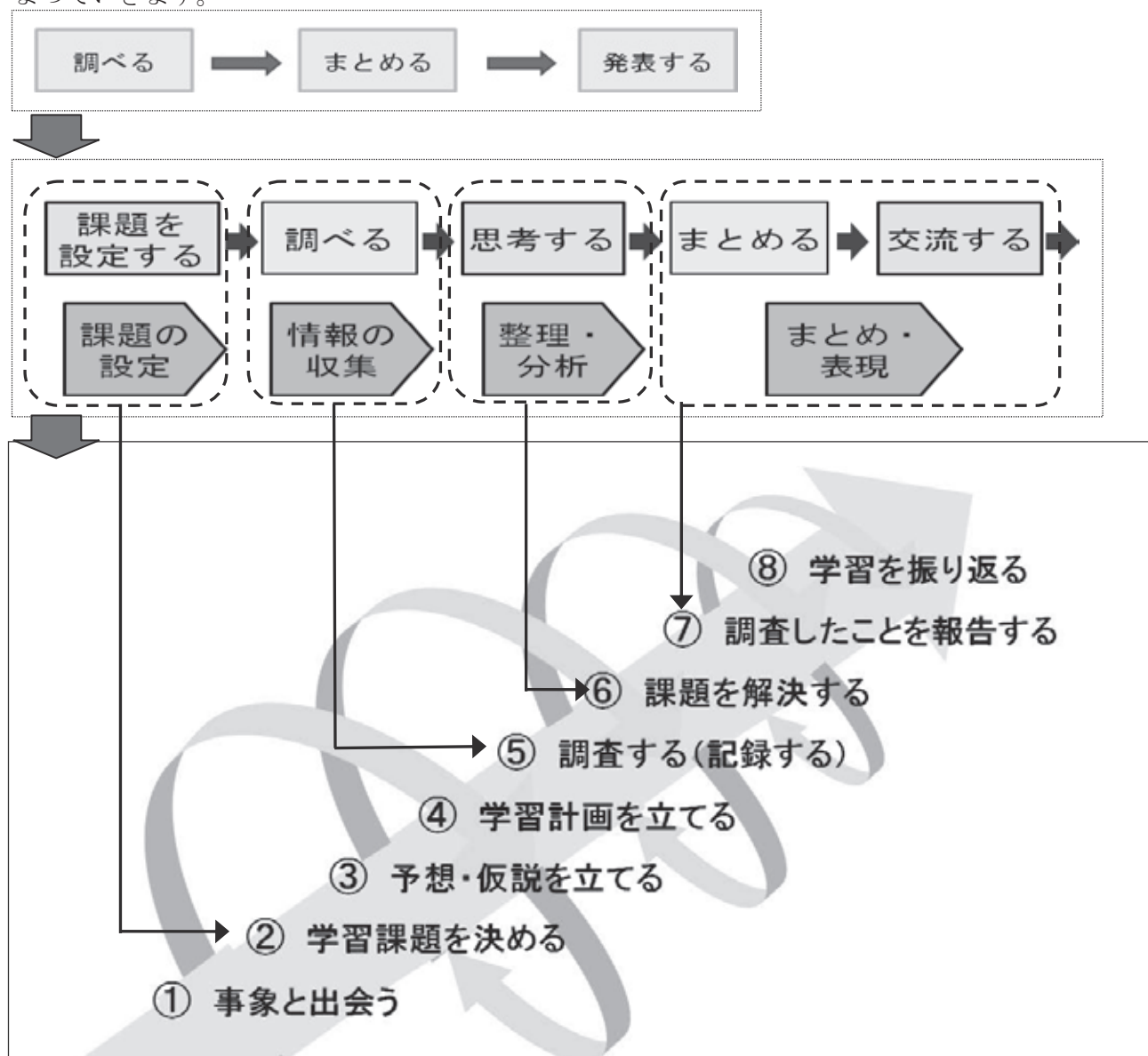
を成立させるための付けたい力の系統表

関すること	自分自身に関すること	他者や社会とのかかわりに関すること
思考力	表現力	活用・学ぼう力
・課題解決をめざして、収集した情報を比較したり、関連付けたりして自分の考えを構築する力	・相手や目的に応じて、効果的な方法で表現する力	・学習の仕方や進め方を振り返り、学習や生活、地域・社会に生かす力
整理・分析 思考操作	情報の発信 表現方法	学習の見直し 自分の見直し (生活・力) 実践
自分の課題を解決するために、育てたり、遊んだり、つくったり、友達の活動を模倣したりして考えることができる。	発見したことを言葉や絵、動作、劇化などの方法により、伝えることができる。	自分の成長に気付き、自分が見つけたことを身近な人に知らせたり、次の学習や自分の生活の中で実際にやってみたりすることができる。
課題を解決するために、収集した情報を与えられた方法で整理し、比較したり関連付けたりして考えることができる。	追究して学んだことを伝えるための様々な方法を知り、相手や目的に応じて工夫して伝えることができる。	学習を通して身に付けた力や追究して学んだことを身近な人に広めたり、これからの学習や自分の生活、地域・社会の中で実際にやってみたりすることができる。 また、学んだことから新たな課題を考えることができる。
課題を解決するために、収集した情報を、自分が考えた方法で整理し、思考操作を行い、自分の考えを構築することができる。	追究して学んだことや自分の考えを相手や目的に応じて、効果的に表現し、工夫して伝えることができる。	学習を通して身に付けた力や追究して学んだことを多くの人に広めたり、これからの学習や自分の生き方に生かしたりすることができる。 また、学んだことからさらなる課題を考えることができる。
課題を解決するために、収集した情報を、自分が考えた最適な方法で整理し、思考操作を重ね、自分の考えを再構築することができる。	追究して学んだことや自分の考えを相手や目的に応じて、最適な方法で効果的に表現し、工夫して伝えることができる。	学習を通して身に付けた力や追究して学んだことを社会に広めたり、自分の生き方に生かしたりすることができる。 学んだことからさらなる課題をもつことができる。 身に付けた力を生活の中で更に伸ばし、個性にまで高めることができる。

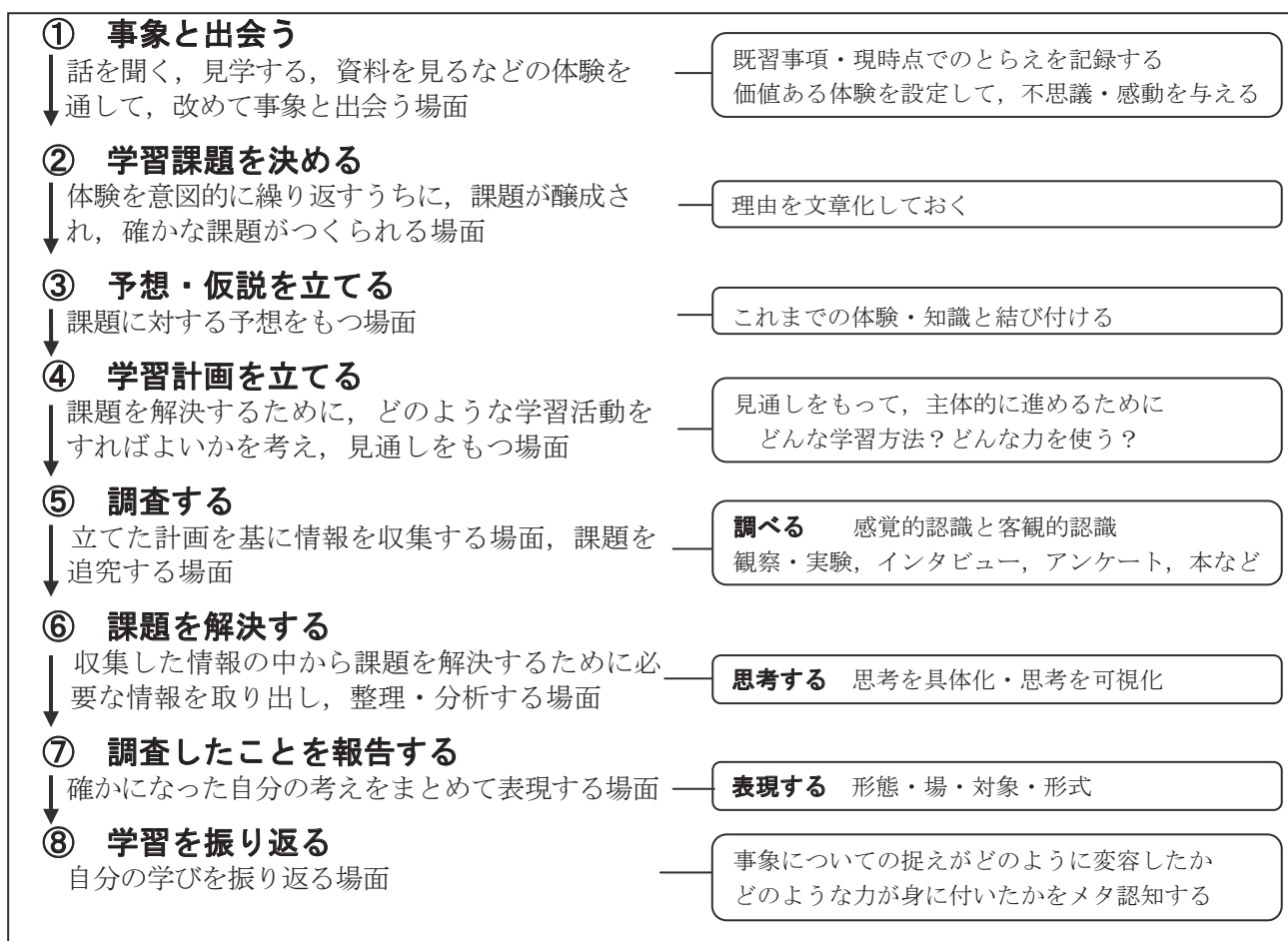
4 単元の学習過程を明確にする ◇◆◆◆

(1) 主体的な学びをつくる八つの学習過程

これまで「体験活動や調べ学習をして、まとめて、発表する」のが「総合」の学習だと捉えられてきたようなところがあります。しかし、探究的な学習では、「何のために体験活動や調べ学習をするのか」「その体験等をして何がわかったのか」「そこからどう考えるのか」が重要です。そのため、「課題を設定する」活動と「思考する」活動を設定します。また、従来の「発表する」活動から双方向性のある「交流する」という活動に変える必要があります。そこで、図2のような学習の過程を構想しました。この過程は、「総合」の探究の過程とも合致しています。また、いきなり課題を設定するのではなく、新たに事象と出会い、いくつかの体験を通して課題を醸成させることが大切です。これらのことを踏まえ、図3に示す、全ての教科等と共通する「八つの学習過程」を新たに考案しました。「総合」では、この八つの過程が繰り返されることで、探究的な学習が深まっていきます。



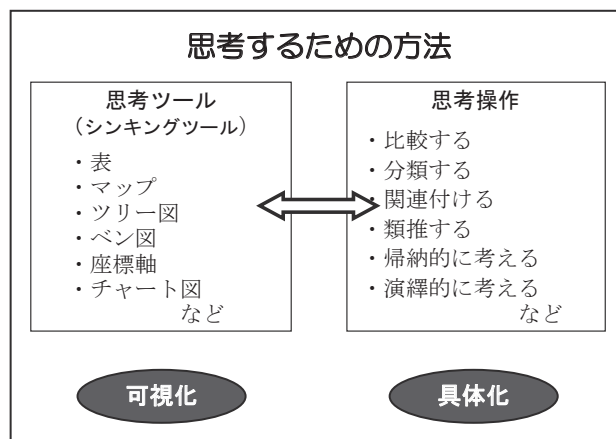
ここで留意しておきたいのは、この八つの学習過程を柔軟にとらえるということです。つまり、①から⑧の過程が順序よく繰り返されるとは限らないということです。単元の展開を一つの型にはめるのではなく、子どもの実態や学習の状況に応じて変化したり、それらに合わせて選択したり、ダイナミックに単元を構想することが大切です。



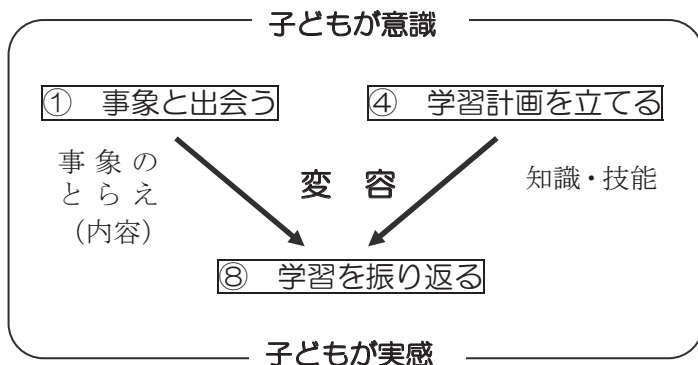
○●○ 思考する活動、整理・分析の過程を充実させる ○●○

思考は本来、頭の中で行うものであるため、イメージがしにくいです。そのため、比較する、分類するなど、思考を具体化することが大切です。ベン図や、座標軸などの思考ツールを使って思考を可視化することで、関係性もみつけやすくなります。思考ツールは、それぞれの利点を生かして、活動に合ったものを選んで使うとよいでしょう。

また、思考する活動は、「パーソナルワーク→グループワーク→クラスワーク」という協働的な学びのプロセス（14 ページ参照）を経ると、考えが広がったり、深まったりして、学びが充実します。



○●○ 子ども自身に学びの有用性を実感させる ○●○



事象のとらえ (内容)

「①事象と出会う」で、現時点での事象に対する捉えを記録しておき、学習を終えてどのように深まったかを確かめます。

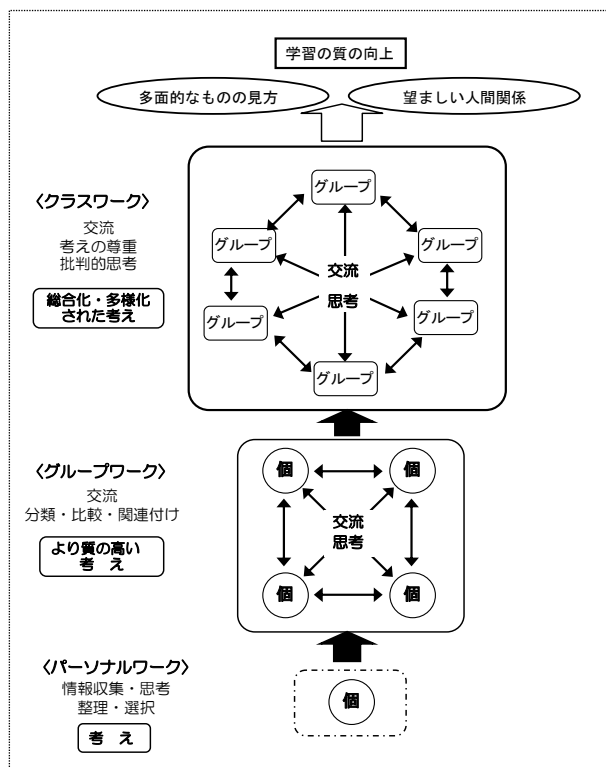
知識・技能

「④学習計画を立てる」で、この学習で使いたい力を記述させておき、「⑧学習を振り返る」でその力が活用できたか、この学習で身に付いた力、更に身に付けたい力は何かを考えます。

(2) 協同的な学びの場を設定する

協同的な学びは、他者との関係という視点からみれば、「協働的学び」と「支援を受けての学び」の二つに大別されます。「協働的学び」とは、同じ学習目標をもち、同じフィールドで共に活動する子ども同士の学習のことです。「支援を受けての学び」は、コミュニティティーチャーなどの支援者である大人との学習のことです。

〇●〇 協働的学び (多様な情報を収集し、異なる視点で検討する活動) 〇●〇



協働的学びは、子ども一人一人が自分の考えをもっていないと成立しません。そのため、「パーソナルワーク→グループワーク→クラスワーク」という協働的学びのプロセスを提案します。「パーソナルワーク」は、個人で行う活動のことです。「グループワーク」は、グループで行う活動のことです。そして、「クラスワーク」は、学級全体で課題を解決する活動のことです。

「パーソナルワーク」で自分の考えを形成し、その考えをもち寄り「グループワーク」で活動することで、より質の高い考えに至ります。そして、「クラスワーク」で、自分たちとは違ったものの見方や考え方があることを知り、それぞれのグループの考えのよさに気づき、更に考えを広げ、深めます。

このプロセスを経ることで、一人一人に多面的なもの見方や思考、望ましい人間関係が育ち、学習の質が向上します。

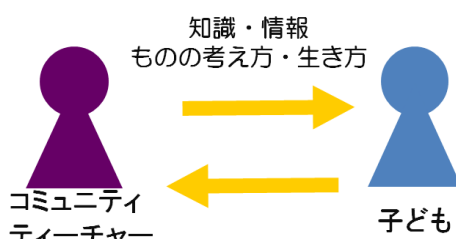
〇●〇 支援を受けての学び 〇●〇

コミュニティティーチャーと子どもの関係は、ツアーコンダクターと旅行客の関係に似ています。ツアーコンダクターは、旅のプランを練ったり、旅行客から求められた際に自分の持っている知識の中からアドバイスをしたりします。しかし、決して前に出ることはありません。コミュニティティーチャーもツアーコンダクターと同様に、前に出ることはなくそっと寄り添い、子どもの学びを支えます。唯一違っているのは、学びのプランを立てるのはコミュニティティーチャーではなく、子どもだという点です。そして、子どもとコミュニティティーチャーとの出会いや関わり方をコーディネートするのは、教師です。

教師は、コミュニティティーチャーと目的を共有することが大切です。そのためには、事前にしっかりと打合せをしておくことが必要です。単元のねらい、単元の構想を説明し、何分でどのようなことを話してほしいのか、その活動が単元のどこに位置付けられるのかを伝えておきます。

コミュニティティーチャーの関わり方 (例)

- 〈課題を発見する場面〉
 - ・素晴らしい技を見せてもらう
 - ・新しい知識を話してもらう
- 〈情報を収集する場面〉
 - ・活動を共にしてアドバイスをもらう
- 〈まとめて表現する場面〉
 - ・学んだことを聞いてもらう など



育つ子どもの姿

- ・望ましい人間関係づくりの姿
- ・自己の生き方を考える姿
- ・地域社会に参画しようとする姿 など

(3) 体験活動を重視する

多様な体験活動を設定することが大切です。意味ある体験を意図的に重ねることで、子どもの学びを豊かにすることができます。本市の小学校全 173 校で作成された「平成 23 年度 総合的な学習の時間 全体計画」（京都市教育委員会による調査）を基に、学習活動の内容を調査したところ、次のような学校があることが明らかとなりました。

- ・山間部の学校で、「林業」や「愛鳥」といった学習内容を扱っている。
- ・祇園祭やずいき祭など、地域にある祭を学習内容として扱っている。
- ・地域に流れる川を素材として「環境」の学習を行っている。
- ・地域で生産されている京野菜を素材として地域の特色を考える学習を行っている。
- ・地域にあるデイサービス・センターを訪問することをきっかけとして「福祉」の学習を行っている。
- ・修学旅行をきっかけとして、交流している学校との交流を深め、互いの地域のよさを再発見する学習を行っている。
- ・学校の中にあるビオトープを活用し、全学年で系統立てて「環境」の学習を行っている。
- ・外国の小学校と交流していることを生かして、「国際理解」の学習を行っている。

このことから、各学校では、地域や学校の特色を生かして学習活動を工夫していることがわかります。

地域や学校の特色を生かした学習活動を行うことは、子どもにとって身近な問題を扱うこととなります。そのため、疑問に思ったことを現地に行ってすぐに確かめられたり、繰り返し体験したりすることが可能となり、充実した体験活動を行うことができます。体験することで、実感が伴った学びとなります。そしてそれらの体験は、自分が住む地域に対する親しみや愛着を育てることにもなります。

また、「スチューデントシティ学習」や「集団宿泊的行事」を上手く活用し、これらの学習や行事を、体験や追究活動の一つとして探究の過程に組み込むことも考えられます。

例) 【「スチューデントシティ学習」を「総合」で扱う場合】

「スチューデントシティ学習」だけで単元を構想するのではなく、この学習を一つのきっかけとして、仕事観、勤労観をテーマに探究的な学習を展開する。

【集団宿泊的行事を「総合」で扱う場合】

防災をテーマに、地震について調べ、実際に修学旅行の機会を利用して阪神・淡路大震災で被害を受けた場所を訪ね、見学・調査などの追究調査を行い、事後、わかったことをまとめ、新たに生まれた課題について追究する。

体験活動を行う際には、必ずメモをする、感想を書く、感想を交流するなどの言語活動をつなげて設定することが大切です。そうすることで、体験して生まれた思いや考えを確かに行うことができます。以前 5 年生を担当していたとき、「もてなす」という言葉を「相手の世話をすること」と漠然と考えていた子どもたちが、茶道体験を重ねるうちに、『もてなす』とはこうやって相手のことを思ってお茶碗を選んだり、お菓子を選んだりすることなんだな。ただ単にお世話をするという意味ではなく、相手に喜んでもらいたいという思いが『もてなす』の意味なんだな。』『もてなす』とは、相手のことを思っておいしくなあれ、おいしくなあれと思ってお茶を点てること。相手を大切に思う気持ちがないと『もてなす』とは言わないのだな。」などと体験を通して一人一人がその言葉の意味を確かに行うことができました。

また、「①事象と出会う」での初めの体験を十分吟味することも大切です。子どもに驚きや感動を与えられる体験活動を設定し、体験活動を意図的、計画的に重ねていくことで課題を醸成し、「②課題を決める」につなげていきます。

(4) 指導と評価の一体化を図る

平成24年7月27日に実施された「生活科・総合的な学習教育指導講座」（京都市教育委員会、京都市生活科・総合的な学習教育研究会主催 於京都市勤業館みやこめッセ）に参加した本市の教員85名を対象に「総合的な学習の時間における問題意識の調査」を行った結果、教員が最も課題と感じているのは「評価」のことであることが明らかとなりました*。

※ [困っていること]	・評価をどのようにしたらよいかわからない (43.5%) ← 割合が一番高い
	・付きたい力をどのように育てたらよいかわからない (32.9%)
[大切にしていること]	・自己評価 (常に、時々を合わせて 82.3%)
	・子ども同士の相互評価 (常に、時々を合わせて 74.1%)
	・指導と評価の一体化 (88.3%)

} 他の項目と比較すると低い

この結果から、付きたい力の不明確さが、評価の困難性を招いているのではないかと考えられます。そこで、評価の手順を明らかにしました。

1 評価の観点を設定する

はじめに評価の観点を具体化することが大切です。『参考資料』（国立教育政策研究所）に評価の観点の考え方とそれに基づく観点の具体例が三つ示されています。全体計画は、「目標」「内容」「育てようとする資質や能力及び態度」の三つを中心に構成されています。また、評価の観点も例1は「目標」、例2は「内容」、例3は「育てようとする資質や能力及び態度」とのつながりが深い観点となっています。このような考え方を踏まえて評価の観点を具体化することが必要です。

2 学年の系統を考える

『解説書』には、「育てようとする資質や能力及び態度の設定に際しては、学年段階ごとに考えることが必要」と書かれています。このことを踏まえて、学年に応じて系統的に子どものあるべき姿を明確にして、段階的に付きたい力を育成します。これによって、実現したい子どもの姿が明確となって、評価がしやすくなると同時に、段階的に付きたい力を育成できるようになります。

3 単元の評価規準を設定する

評価の観点を具体化したものを基に、単元の評価規準を設定します。「総合」において子どもの学習状況を評価するためには「育てようとする資質や能力及び態度」を踏まえることが大切です。そのため、各単元において評価規準を設定する場合、各観点到即して期待される具体的な子どもの姿をイメージするときも「育てようとする資質や能力及び態度」と「内容」に照らし合わせて考えることが重要となります。

4 評価の方法を工夫する

最後に、評価の方法を具体化します。評価には大きく分けて三つの方法があると考えられます。発表や話し合いの様子を「観察によって評価する方法」とレポートやポスターなどの「制作物によって評価する方法」と「ポートフォリオによって評価する方法」です。

指導者である教師は、これらの三つの方法を基に評価を行います。また、教師だけではなく、子どもがこれらの資料を基に、自己評価や相互評価を行うことも求められます。

評価は、単元の最後に行うだけではなく、形成的評価を大切にしたいです。評価をすることで、子ども一人一人の力が明らかとなり、個に応じた適切な支援が行え、更に力を伸ばすことができます。また、教師自身も本時の目標や支援が適切であったかを振り返り、単元の展開を修正することもできます。これが、指導と評価の一体化たるゆえんです。